コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅸ

― 2022年度学生手記の分析 ―

青木理奈・鈴木　靜・福井秀樹
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子
池　貞姫・十河宏行・中川未来

1．はじめに

新型コロナウイルス感染蔓延の長期化は、大学生の学修や日常生活にどのような影響をもたらしているのであろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曽有の災厄である。全国の大学によるコロナ禍対応は、年々変化しており、愛媛大学でも2022年4月から原則対面による授業に切り替えられている。さらに、2023年5月8日から新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したことに伴い、行政による事業や行動の制限も緩和されている。社会一般でもコロナ禍前の経済社会状況に戻りつつあるとはいえ、多くの人々はコロナ禍以前にはなかった生活全般にわたるストレスを抱えながら生活している。大学生も同様であると考えられるが、具体的に授業や課外活動、アルバイトや就職活動等にどのような変化をもたらし、どのようなストレスがかかっているのであろうか。

本稿は、2022年度における学生のコロナ禍における学生生活の変化や学生自身の思いや不安を聞くため、手記を募集し収集した。収集した手記を、学生支援の観点から分析して整理し、その一部を公表する。筆者らは、主にコロナ禍における大学生の学修状況や生活状況を理解することに努めた。また、学生自身の細やかな心情の動きや変化が現れている部分に特に注目し、コロナ禍の記録の一部として公表する。

なお、筆者らは、今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになると考えている。なにより、感染状況や国および地方自治体の感染症対策が刻一刻と変わっていくコロナ禍で、その変化や大学や学部対応を時系列で収集および保存することは不可欠なことであると考えている。これまで本プロジェクトでは、愛

媛大学法文学部の学生を対象とし、アンケートを2020年度から3年間実施し、学生手記を収集・分析、さらに座談会を開催することを通じて、学生生活の変化や心情等を把握してきた。本稿は、その一環として公表するものである。

２．対象と方法

2022年10月28日から2023年1月31日の間、愛媛大学法文学部の学生を対象に、「コロナ禍における法文学部学生の学修・生活への影響について」の手記を募集した。具体的には、「コロナ禍における2022年度の大学生活や日常生活を1,200字程度にまとめてください。」と依頼した。その結果、29件の手記が寄せられ24件を分析対象者とした。本稿では2021年度までの遠隔授業を経験している2回生以上を分析対象とし、1回生（編入3回生含む）5件の分析については、別稿に譲ることとする。

２－１．対象者の属性

対象者の属性[1)]は、以下の表に示すとおりである。

ＩＤ	性別	2022年度学年	コース	昼夜間主の別
2	女性	4回生	法政	夜間主
3	男性	4回生	ＧＳ	昼間主
10	女性	3回生	法政	昼間主
11	女性	3回生	人文	昼間主
13	男性	3回生	法政	昼間主
14	女性	4回生	法政	昼間主
16	女性	4回生	ＧＳ	昼間主
19	男性	2回生	法政	昼間主
21	女性	4回生	ＧＳ	昼間主
22	男性	4回生	法政	昼間主
26	女性	3回生	法政	昼間主
27	女性	2回生	法政	夜間主
28	女性	3回生	人文	夜間主
29	女性	2回生	法政	昼間主

1）愛媛大学法文学部には、昼間主・夜間主コースがある。更に、昼間主では2回生から、3つの所属コース（法学・政策学履修コース［法政］、人文学履修コース［人文］、グローバル・スタディーズ履修コース［GS］）に分かれ、夜間主では2回生から、2つの所属コース（法学・政策学履修コース［法政］、人文学履修コース［人文］）に分かれる。

30	女性	4回生	人文	昼間主
32	男性	3回生	ＧＳ	昼間主
33	男性	4回生	人文	夜間主
34	女性	2回生	ＧＳ	昼間主
38	男性	2回生	人文	昼間主
39	女性	4回生	人文	夜間主
40	女性	2回生	人文	夜間主
41	男性	4回生	法政	夜間主
43	女性	2回生	人文	昼間主
44	女性	3回生	ＧＳ	昼間主

なお、ID22までの学生は、2021年度も手記を提供した学生であり、同一 ID としている。

２－２．分析方法

手記の分析を行うにあたっては、基本的にクリッペンドルフの内容分析手法（クリッペンドルフ、1989）を用いた。また、この分析手法を用いた学生のレポート分析に関する先行研究、森・大橋（2008）に多くの示唆を得ている。具体的には、以下の手順により分析を行った。

1）手記内容を文脈毎に全て抽出する。
2）文脈の内容により記録単位を作成する[2)]（抽出した文脈をまとめる）。
3）類似性のある記録単位に基づき、サブカテゴリー名を付ける。
4）同様の作業（類似するサブカテゴリーをまとめ）をし、カテゴリー名を付ける。

３．倫理的配慮

調査対象者の学生には、研究の趣旨について書面による説明を行い、研究への協力を承諾した学生が手記を提出している。本稿では、プライバシーの保護のため個人名は特定されないように配慮している。

2）記録単位とは、文脈毎に抽出した文章をさらにまとめたものである。例）「対面での授業が本格的に開始し、他の学生さんと密に関わる機会も増え、一緒に授業外で勉強をすることも多くなった。」、「下級生などこれまであまり話したことのなかった学生との交流をすることが出来た。」等の文脈は、「友人作れた・交流増加」という記録単位とした。

4．結果の概要

本研究では、テキスト化された手記を文脈毎にまとめ、それら文脈内容により記録単位を作成した。その結果、記録単位数は364件になった。

次に、文脈内容の類似性に従って分類したところ、9個のカテゴリーに分類することができた（表1）。さらに、9個のカテゴリーを類似性に基づいて3つのコアカテゴリーに分類し、それぞれ「大学生活」、「日常生活」、「その他」とした。以下、コアカテゴリーごとに分析していく。

表１. 類似する記録単位から分類した9カテゴリー　N＝364件

コアカテゴリー		カテゴリー	
大学生活	188	1. 授業関係	133
		2. サークル・部活動	14
		3. 友人関係	41
日常生活	82	4. 行動面	29
		5. 体調面	30
		6. 経済面	13
		7. 家族関係	10
そ の 他	94	8. インターンシップ・就活	89
		9. 留学	5

4－1.「大学生活」に関する内容分析

表2 「大学生活」に関する内容分析結果　N＝188件

カテゴリー		サブカテゴリー		類似記録単位群	
授業関係	133	対面授業（2022年度受講）	72	A 良い、学習意欲がでた、集中できる	52
				B 対面への不安、戸惑い、疲弊、億劫	10
				C 対面と遠隔の併用への負担・要望・意見	10
		遠隔授業（2020・21年度受講）	49	A 不満・退屈・集中力低下・疲労・不安	34
				B 遠隔が自分に向いている、時間や場所が自由に使えた	15
		遠隔授業（2022年度受講）	9	A 慣れてきた、選択肢が増えた、問題ない、工夫している	8
				B 集中力低下	1
		教員との関係	3	A 助けてもらった、配慮があった、有難いと思った	3

サークル・部活動	14	活動に対する記述	8	A 対面での活動が増えた、増えそうだ	2
				B 計画的な活動できない、もどかしさや怒り	3
				C 引継ぎ等、役割に苦労した（継承問題）	3
		振り返り	6	A 活動できなかった	1
				B 制限はあるが、活動できた	5
友人関係	41	対面授業・対面活動等	21	A 友人作れた・交流増加	14
				B 友人作れず・交流減少	7
		振り返り	20	A 友達が出来ず苦労した、関係性の発展がなかった	13
				B 少ない対面授業や部活で友人ができた	4
				C 友人と疎遠になった、	3

「大学生活」に関しては、3個のカテゴリーと8個のサブカテゴリーに分類することができた。このうち、カテゴリーについては類似記録単位の多い順に「授業関係（133件）」、「友人関係（41件）」、「サークル・部活動（14件）」だった。

「授業関係（133件）」のサブカテゴリーの内訳は、「対面授業（2022年度受講）（72件）」、「遠隔授業（2020.21年度受講）（49件）」、「遠隔授業（2022年度受講）（9件）」、「教員との関係（3件）」であった。類似記録単位群で最も多かったのは、対面授業に対しての「良い、学習意欲がでた、集中できる」であり、原則対面となった2022年度の大きな特徴となった。

「友人関係（41件）」のサブカテゴリーの内訳は、「対面授業・対面活動等（21件）」、「振り返り（20件）」であった。最も多かった類似記録単位は「友人作れた・交流増加」であり、次いで、過去を振り返って「友達が出来ず苦労した、関係性の発展がなかった」と続いた。

「サークル・部活動（14）」のサブカテゴリーの内訳は、「活動に関する記述（8件）」、「振り返り（6件）」であった。類似記録単位で最多のものは、過去を振り返って「制限はあるが、活動できた」ことの記述であった。次いで「計画的な活動できない、もどかしさや怒り」、「引継ぎ等、役割に苦労した（継承問題）」と続き、2022年度の対面活動に関しても、依然として制限が課せられた中での活動を余儀なくされ、活動停止が繰り返されることに対する苛立ちや引継ぎに苦労している戸惑いがうかがえる。

４－２.「日常生活」に関する内容分析

表3 「日常生活」に関する内容分析結果　N ＝82件

カテゴリー		サブカテゴリー		類似単位記録群	
行動面	29	学生の気持ち	11	A 生活を楽しみたい、楽しい、充実している	5
				B 感染に不安がある	1
				C 他人の行動に矛盾や怒り・疑問がある	5
		振り返り	6	A 見つからなかった、やめた	4
				B 趣味等の時間に費やせた、遠隔でこそ参加できた	2
		変化あり	9	A アルバイトを始めた、増やした、忙しい	6
				B 希望する時間帯でアルバイトが見つからない	2
				C 感染対策が緩和された	1
		変化なし	3	A 昨年とさほど変わらない	3
体調面	30	不調	11	A 身体不調、コロナ罹患、腰痛、身体がしんどい	6
				B 精神不調、ストレス、不安感あり	5
		振り返り	10	A 精神的な不調あり	9
				B 身体的な不調あり	1
		安定	9	A 精神面で安定した、良好である、前向き	7
				B 身体面が安定した	2
経済面	13	影響あり	4	A 収入がない、減少して厳しい	4
		振り返り	6	A 困らなかった	2
				B 収入がない、困った	4
		影響なし	3	A 収入等安定（増加）し、困ったことはない	3
家族関係	10	振り返り	4	A 交流の時間が増えた、関心が上がった	4
		学生の気持ち	4	A 親のありがたさ、安心感を感じる	2
				B 親の対応に憤る、親に当たってしまった	2
		現実に対する記述	2	A 特になく、交流の頻度は変わらない	2

「日常生活」に関しては、4個のカテゴリーと13個のサブカテゴリーに分類できた。類似記録単位は多い順に「体調面（30件）」、「行動面（29件）」、「経済面（13件）」、「家族関係（10件）」と続いた。

「体調面（30件）」のサブカテゴリーでは、「不調（11件）」が一番多く、次いで、過去の「振り返り（10件）」、「安定（9件）」の順に続く。最も多かった類似記録単位は「精神的な不調あり」であり、コロナ禍初期の不調について書かれた記述が多かった。

「行動面（29件）」のサブカテゴリーの内訳は、「学生の気持ち（11件）」、「変化あり（9件）」、「振り返り（6件）」、「変化なし（3件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「アルバイトを始めた、増やした、忙しい」であり、政府の行動制限解除等の

ためアルバイトに入る機会が多くなったり長時間化して忙しくなったこと、人員不足によりアルバイトに入らざるを得ない苦労を記述するものであった。

「経済面（13件）」のサブカテゴリーの内訳は、「振り返り（6件）」、「影響あり（4件）」、「影響なし（3件）」、であり、最も多かった類似する記録単位は、コロナ禍初期を振り返って「収入がない、困った」と、2022年度も「収入がない、減少して厳しい」とする記述であった。

「家族関係（10件）」のサブカテゴリーの内訳は、「振り返り（4件）」、「学生の気持ち（4件）」、「現実に対する記述（2件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「交流の時間が増えた、関心が上がった（4件）」だった。

４－３.「その他」に関する内容分析

表４　「その他」に関する内容分析結果　Ｎ＝94件

カテゴリー		サブカテゴリー		類似記録単位群	
インターンシップ・就活	89	オンライン活動	25	A 便利、金銭的なメリット、リラックス	19
				B 通信トラブルがあった	6
		対面活動	8	A 肌で感じる、直接聞ける、リアルな話	8
		学生の気持ち	27	A ガクチカ問題、不安（就活と感染の両面）、焦燥感	14
				B 周りへの感謝	4
				C 会社の説明会や選考方法への疑問、大学への要望	6
				D 困らなかった、不安を感じなかった、自信	3
		現実に対する記述	29	A 積極的に参加した、試験対策した、面接対策した	21
				B 合格、内定が決まった	7
				C 希望通りにならず	1
留学	5	学生の気持ち	5	A 希望が見える、参加したい	3
				B 断念する	2

「その他」に関しては、2個のカテゴリーと5個のサブカテゴリーに分類された。類似記録単位は「インターンシップ・就活（89件）」、「留学（5件）」だった。

「インターンシップ・就活（89件）」のサブカテゴリーの内訳は、「現実に対する記述（29件）」、「学生の気持ち（27件）」、「オンライン活動（25件）」、「対面活動（8件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「積極的に参加した、試験対策した、面接対策した」であった。

「留学（5件）」のサブカテゴリーは1個で、「学生の気持ち（5件）」であり、類似する記録単位は「希望が見える、参加したい」、「断念する」とする記述だった。

5．分析と考察

今回の手記で、類似する記録単位数が最も多かったのは、「大学生活」コアカテゴリー中の「授業関係」カテゴリー（133件）であった。2020年度、2021年度の手記の変化を見てみると、2020年度では全員が遠隔授業について触れ、2021年度では遠隔授業に触れない学生が見られ、2022年度では、遠隔授業の記述は少なく対面授業の記述が大幅に増えたことである。

1）大学生活に関する内容分析

2022年度の「授業関係（133件）」では、手記を寄せた全員に対面授業に関しての記述がみられた。対面授業を受けることで大学生であることを実感することや、対面授業のほうが授業内容の理解が深まり、勉学へのモチベーションも高まることの記述が多かった。また、待ち望んでいた対面授業に対して、好意的な記述がほとんどであった。

しかし同時に、対面授業に切り替わった不安や混乱も見られる。具体的には、教室の感染対策が不十分ではないか等の不安、通学が必要になったことによる身体的な疲れ、対面授業移行期における時間割の設定や、天候等への配慮が乏しい授業に対する不満が見られた。なかには、対面授業になり、遠隔授業に比べ成績が下がったとの記述もあった。学生はこの数年でようやく慣れた遠隔授業から、急速に切り替わる対面授業への移行に対して、喜びとともに不安や戸惑いを感じた1年であったといえる。

1限の授業をとっていたので、それなりにきちんとした身なりで8時半に学校に行く大変さや、それなりにきちんとした姿勢で1時間半授業を受ける大変さはあったが、その大変さも含めて、待ち望んでいた大学生活がやっと来てくれたと感じた。遠隔授業も、最初はともかく2年目ともなると、特段不満を感じることはなかったのだが、やはり対面授業の方が頭に入ってくる感じがした。モチベーションが上がった。より主体的に学んでいるように感じた。（ID10）

授業に関して、遠隔授業と実際に出席しての授業が入り混じることが負担になることがありました。遠隔非同期や声をだす必要のない遠隔同期授業では大学内でも受講しやすいですが、声を出す必要のある授業は受講しにくいです。そのため、履修登録の際に少し考慮する必要がありました。（ID38）

もう少しオンラインを活用しても良いのではという場面もなかったわけではない。例えば、警報が出るほどの大雨が降ったことが何度かあり、その際、自分はたまたまその前に講義があり、大学にいたからよかったものの、出席率は普段より悪かった。また、受講人数と教室の収容可能人数がほぼ一致しており、感染対策という面で有効な対策が取れているのか不安になるぐらい、人が過密状態で教室にいるという状態の講義もあったりした。以上のように、気象状況により登校に不安を抱えている人が多いと容易に予想できる時や、全国的な感染状況が悪化しているときに過密の教室で講義をせざるを得ない時などは、せっかく2年間もオンラインで講義をしたという経験があるのならば、それを活かすことこそが、あの2年を空白の期間にしないために重要ではないかと感じた。(ID13)

対面での授業を通して、自分の興味のある分野に気づき没頭することができるようになったし、同じ分野に興味のある友達も新たにでき、早く次の授業を受けたいというわくわくする気持ちも湧いてきた。分からないところがあった時、遠隔授業の時にはこんな質問の為にわざわざメールをしていいのかという躊躇いから容易に質問すらできなかった遠隔時に比べ、対面では気軽に質問もでき、他者の質問からも学ぶことができ、理解度は高まった。そして出席していることを確認するのが難しい遠隔授業で課されていた膨大なレポート課題も、簡単なコメントカードへと変わり、自分の必要とする学習への時間も増やせるようになった。必然的に外にでる時間も増えてストレスも減り、様々な面で私の生活がプラスの方へ動き、精神的にも体力的にも負担は減ったと感じる。(ID34)

また、対面授業になり出席を重視する教員の対応に違和感を持つ一方、細やかな配慮を口にする教員へ感謝する記述が見られた。さらに、専門教育科目と共通教育科目の性格の違いから、対面授業と遠隔授業の教育提供ツールを見直すことを提案する者も見られた。とりわけ専門教育科目については、目の前で教員の説明を聞きながら学ぶことで理解が深まることで、対面授業に対して賛意を表す学生が多かった。

遠隔授業から対面授業へと急遽、切り替わった際の授業形態に対し教員の対応にも大きな差があった。「対面授業に変わったのだから出席できなければ減点もあり」という恩赦も執行猶予もない講義もあれば学生の負担を考慮し視聴時間を短縮し課題を軽減した講義もあった。更に「皆さん、どうか無理をせず元気で前向きに頑張って下さい」と穏やかな表情でコメントを添えて下さる神教員も存在した。(ID28)

共通教育科目に関しては、オンライン授業でよかったなと思っています。共通教育科目は専門教育と比較して内容が難しいことが少ないため、動画で見る方が倍速することができたり、止めたいときのみ止めて確認できて対面授業より効率的であったと思います。
……
専門科目もオンライン授業を受けました。専門科目は内容が専門的であるが故に動画だけでは内容理解が厳しい面があり、対面授業を受けた今、専門科目はオンライン授業より対面授業が適していると思いました。(ID27)

大学生活での「友人関係」については、対面授業を通じて学生同士の関わりが増えたことを喜ぶ記述が多数を占めた。一方で、いまだ交友関係が広がっていない学生や、感染防止の理由で食事に誘うのをためらい、交友関係を深めることができない記述も見られた。コロナ禍初期のような、友人ができず不安を抱え、孤独な気持ちを吐露する学生はいなかったものの、対面授業になっても交友関係の進展がない学生の存在は見逃せない。学生自身は、入学時に交友関係を築けなかったことを理由に挙げており、交友関係が広がらず不安を抱え孤独な学生への見守りや支援は、卒業時まで継続する必要があるだろう。筆者らが最も心配していたのは、コロナ禍初年度である2020年度入学生であり、2022年段階で3回生である。手記によれば、彼らの交友関係は広がり、関係性も良好だととらえている者が多い。この点は対面授業に切り替わったことによる、大きな成果と言えよう。なかには、もう大学では友人ができないと諦めていたところ、対面授業に移行した3年目にして友人ができたことに対する喜びの記述も見られた。とりわけ、3回生からの専門演習（通常、ゼミと呼ばれる）を通じて、調査研究活動を共にするなかで交友関係が深まったという記述もあり、コロナ禍前の大学生活に戻ってきていることを感じさせる。

今年度は講義が被って仲良くなった人々と休憩や教室移動の合間に談笑したり講義終了後食事に行ったりするようになった。特に、連休を利用して県外まで旅行したり夏祭りに行く仲の友人や、講義がきっかけで恋人もできたので学生生活が大変充実してきたように感じている。去年は大学での友人があまりできず高校時代の友人ばかりと遊ぶ生活だったので大学はこの程度かと正直落胆していたが、今年は思い描いていた理想の大学生活を送れていて精神の健康状態も良好である。(ID19)

特に対面授業になったからと言って交友関係が広まることは特になかった。講義形式の授業ばかりで、周りの人と話す機会が無いのが主な要因だと思う。1回生の大学に入りたての時に人脈を広げるチャンスがほとんどなかったことが悔やまれる。(ID29)

友人関係に関しては、ゼミ活動を通して友人が増えた。今年の夏に、他大学の同じ分野を専攻しているゼミと合同で、各大学が研究したテーマで発表・議論を行う分科会に参加した。その研究の一環で、夏休み中にゼミのみんなと調査したり話し合ったりした。それを通じて、かなり仲が深まったと思う。個人的には、夏休み前までは少し気を遣う部分があったのだが、調査や話し合いを進める中で、気を遣いすぎず素の自分を出せるようになった。大学4年間で高校までのような友人には会えないんだろうなと思っていたので、驚きと嬉しさを感じている。(ID10)

「サークル・部活動」に関しては、活動が再開できるようになった喜びと、大学生活が充実したとの記述が多く見られた。しかし同時に感染拡大防止対策のために、サークル・部活動への一部制限が続いていることや、急きょ変更を余儀なくされることへの不満が多く見られた。2022年度で特筆すべきは、サークル活動の継承問題がある。コロナ禍が始まった2020年度からサークル・部活動が停止され、感染状況にあわせ規制が緩められたり制限されることが繰り返された。3年間にわたり繰り返されたことから、コロナ禍前のサークル活動を経験しているのは、4回生のみである。2022年度には4回生はサークル活動を離れるため、3回生以下がサークル活動の運営に苦心している。

なお、2021年度に比較して、2022年度の「サークル・部活動」に関する記述は少なかった。推測の域を出ないが、「サークル・部活動」に入る学生自体が減少していると思われる。なかには新入部員が確保できず解散に至った例もある[3)]。

現在はほとんどが対面で開講されており、2021年前期と比較し従来の大学生活に近づいているように感じる。しかし、サークル活動の規制や大学で開催されるイベントなどコロナ禍による本来の大学の姿は取り戻せていないように感じる。(ID43)

3）2023年3月に、3年近くの間、新入部員が確保できず愛媛大学落語研究会が解散した。同研究会は1974年に設立され、2017年ごろには約70人が所属していた。「愛媛大落語研が解散　半世紀の歴史に幕　コロナ禍影響　新入部員確保できず」愛媛新聞6月5日

現在の実働メンバーである1～3回生は対面での活動を行ったことが無いため、残された過去のデータのみで活動再開へ導く必要があった。どのようにサークル運営を行うべきかわからない中、3回生として後輩を引っ張っていく事が困難だった。(ID11)

2）「日常生活」に関する内容分析

「日常生活」に関する記述では、「体調面（30件）」についての記述が一番多く、「安定」より「不調」が多いという結果になった。特筆すべきは、2021年度には減少した「体調面」の記述に関して、2022年度は再び増え、心身ともに体調を崩しがちであった旨の記述が多くみられた。とりわけ、メンタルヘルスの不調から心療内科を受診することを記述した者も、複数見られた。

対面授業への移行は、学生にとっては対面授業に慣れるとともに、新たに交友関係を構築していく期間であり、相応なストレスがかかる。対面授業への移行について、比較的スムーズに適応できた学生がいる一方、適応に時間がかかっている学生が存在する。コロナ初期の遠隔授業期間にメンタルヘルスが不調になりその状態が続いている学生、遠隔授業に慣れメンタルヘルス不調に改善が見られたものの、対面授業への移行で新たにストレスがかかり、再度、不調を抱えるものも見られた。

さらに2021年度までは、ワクチン接種後の副反応について書かれた内容が目立ったが、今回はコロナに罹患したことについての記述が見られた。2022年度は「第7波」[4)]「第8波」[5)]で感染が学内でも多くあり、手記を寄せた学生のなかでも罹患した者が複数おり、症状や療養の状況について書かれたものが見られた。

体調の変化では、コロナにかかったことと腰痛があります。コロナは夏休みに帰省した時に家族から感染しました。ワクチン3回打っていたんですけどね。熱が38度まで上がり、せきがものすごく出て、のどは唾をのんだだけなのにガラスの破片を飲み込んだような激痛で、味覚と嗅覚が数日なくなりました。

……

コロナの症状で体は本当にしんどかったけど、もういつ誰が感染してもおかしくないというような空気に変化していたので、精神面はそんなにつらくなかったです。(ID2)

4）厚生労働省によれば、2022年7月1日～9月30日の患者急増期間を指す。

5）厚生労働省によれば、2022年11月～2023年1月31日の患者急増期間を指す。

大学に通うことができていない状態にある自分を問題だと感じたことから、心療内科に通う時期がありました。しかし、それ自体はあまり改善に効果を感じませんでした。
ただ、2022（令和4）年度になり、対面での授業が増えたタイミングで（ブランクがあるため上手くいかない、続かない部分もありましたが、）大学に通い始めるうちに自分に自信を持つこともでき、ある程度順調に日々を過ごせるようになりました。今では前向きに捉えることができており、頑張りたいという気持ちでいます。**(ID44)**

メンタルヘルスについては、もともと崩しやすいタイプではあったのですが、去年の6月頃から悪化したように感じています。
心療内科に通ってみたり、実家に帰省したりしてみましたが、あまりよくなることはありませんでした。ご飯が食べられないことと、眠れないということが苦しく、大学にも通えないというような状況でした。昨年11月頃が最もひどく、処方された睡眠薬をのんでずっと寝続けるということをしていました。現在は少し回復していて、大学にもある程度通えていますが、言葉では表現しづらい苦しさみたいなものを感じています。**(ID33)**

「行動面（29件）」のうち、「アルバイトを始めた、増やした、忙しい（6件）」が最多であった。アルバイトに費やす時間が長くなる傾向があり、学生もそれを自覚している。総じて、学生はアルバイト等の学外活動に、前向きな姿勢で臨んでいると評価できる。

一方で、アルバイト時間の増加については、飲食業等の人員不足により学生の労働力に頼らざるを得なくなっている現状が浮かび上がる。2022年度は、政府による行動制限も解除され、「GoTo イート」や全国旅行支援等の施策が行われたことにより、人の往来が活発に行われ、飲食業も景気が回復しつつあった。一方で、コロナ感染者が増える中、従業員で罹患する者が出れば、同じ職場内で学生も労働時間を増やさなければならなくなった状況があった。学生にとっては、対面授業への移行もあり大学中心の生活を送りたいと希望するものの、それがかなわなかったことが手記から読み取れる。

私の働いているアルバイト先は、従業員の人数が少ないため従業員がコロナウイルスに感染してしまうと、他の人が代わりにシフトに入らなければならないため、その点における負担は大きかった。**(ID43)**

アルバイトにおいても、これまで以上に忙しかったように感じている。私は接客業に従事しているが、単純にお客様の数だけ見ても昨年や一昨年に比べ増加しているし、売り上げを見ても数字が伸びている。その分、シフトを削られるということはなくなり、むしろコロナ禍で人員を削減していた分人手不足が生じており、同じ人が何度も出勤しないといけない状況となっている。アルバイトの私たちはもちろん、社員としてシフトを管理している人の負担が大きくなっていると感じている。人手不足を肌で感じることで、コロナ禍のしわ寄せが来ていることを実感している。(ID16)

趣味についてはかなり充実していた。好きなゲームシリーズのリマスターが先日発売されたり、25周年を迎えていろいろなイベントがあったからかもしれない。東京の官庁訪問の間際に東所沢やコラボカフェに行けたことはかなり経験として大きかった。(ID14)

経済面では、引き続き、学生間で収入格差が見られた。仕送りやアルバイト等で収入が安定している学生がいる一方で、経済的に厳しい生活をしている学生も厳然として存在する。仕送り額に変化はないが、2022年春頃からの急激な物価上昇により、経済的に苦しくなった記述があったことも特徴的である。

接客のアルバイトをしていましたが、実家にいた2020年度の前学期はアルバイトをお休みしていました。後学期になり私が松山に戻る頃には、お店の休業期間も明けてそれまで通り働くことができました。現在まで特に困ることはなく続けられています。(ID30)

コロナ禍の影響で仕送りが減るという事態にはなりませんでしたが、コロナ禍に伴う物価高騰で食品や日用品の値上がりがあり、普段購入しているものが少しずつ高くなってその積み重ねに苦しむ状況にあります。オンライン授業が主流の時は、学校に行かなければならない機会が少ない分、アルバイトに時間を割くことができたのですが、対面授業になってからはそういうわけにもいかず、週に3～4回が限界なので、自分の収入も昨年に比べたら少し減っているように感じます。もちろん物価が上がった分最低賃金も上がったので自分のバイト先の時給も上がったのですが、生活必需品の価格高騰がかなり大きかったので、結果的にマイナスになるというのが今の状況です。(ID40)

まず、お金の面で困ったことだ。私は大学内でアルバイトをしていたのだが、コロナ禍で大学の活動が止まったためシフトに入ることができなくなってしまった。実家に戻ってからもアルバイトがしたかったが、いつ大学のアルバイトが再開するのかわからず、休業中のお店も多く他のアルバイトを見つけることも難しかったため、約1年は安定した収入がなかった。学費や松山で借りている家の家賃などは自分のお金と奨学金と両親のお金から支払っていた。しかし自分の収入もなく、両親の仕事にも影響があったため収入が減り、もともと苦しかった家計はさらに苦しくなった。お金は支払うが、大学も家も使えないという状況に対し何とも言えない気持ちになった。実家にいるときは両親の負担を増やさないよう、お金を使わない生活をするよう心掛けた。(ID39)

家族関係については、家族との時間が増え関係が良好になったとの記述が複数見られた。両親への感謝が書かれているものもあり、肯定的な記述が目立った。とりわけ外出等行動に制限がかかる状況ではストレスがかかり、その状態を家族に見守られていると実感した記述が見られた。

なお、今回の手記テーマは、主にコロナ禍での大学生活等の変化についてであり、学生は、家族関係の悪化などプライバシーに深く立ち入る記述を避けたかもしれない。家族との時間が増えることが、必ずしも関係が良好になるとは限らないことは指摘しておきたい。

私は実家暮らしであるが、以前よりも家族と過ごす時間が長くなり会話の数が増えたことによって、関係が良好になったように感じた。(ID41)

会いたい人に会えず、行きたいところに行けず、溜まったストレスをぶつける先もなく、大切な家族にあたってしまう時もあったがそれでも、変わらず私を温かく守ってくれる親の偉大さに気がつくことができた。(ID34)

3)「その他」に関する内容分析

今回の手記の特徴は、「インターンシップ・就活」に関しての記述が、昨年一昨年に比べ急増したことがあげられる。2020年度18件、2021年度39件と比し、2022年度は89件にも上る。その具体的内容は、オンライン面接に関するものが多かった。自宅から参加できるオンライン面接の利点、またオンライン面接の場合は企業や面接実施会場までの交通費がかからない経済的な利点をあげる。一方で、オンライン面接の場合

は、面接官や他の就職活動中の学生の様子がわからないこと、企業の建物や従業員が働く様子がわからないことの不安を記述する者や、自宅に設置している Wi-fi 等の通信トラブルにより、面接やグループディスカッションに参加できなかった、あるいは参加ができても面接官の説明が聞き取れず、また学生自身の発言も相手方に届かなかった等の状況もあった。

さらに特筆すべきは、就活の面接で聞かれることが多い「学生時代に力を入れたこと」の略称である「ガクチカ」問題に触れた記述が見られたことである。コロナ禍で大学および課外活動に行動制限がかかった時期が長い4回生は、自身には「ガクチカ」が存在しないのではないか、または話すべき内容はどのようなものかに不安を感じていたことが読み取れる。

2回生、3回生の時がコロナで、あまり活動的なことができなかったこともあり、学生時代に力を入れたこと（ガクチカ）のネタがなくて困りました。Twitter では『このままでは学生時代に打ち込んだものがワクチンだけになってしまう』（2021年10月11日）というツイートがバズっていたので、みんなネタに困っているんだなと感じました。私は幸い1回生のときにサークルに参加していて、そのときのエピソードを書くことができましたが、24卒の子は入学した時からコロナで、外にでることもサークルをすることも制限されていたので、本当に困っているだろうなと思います。(ID2)

今現在就職活動中であるが、特に困ったことはないように感じる。オンラインでの説明会や選考がほとんどになったため、本来であれば部活動の関係でなかなか対面での参加が難しいものも、オンラインのおかげで幅広い説明を聞くことが出来ている。インターン内のグループワークなどは対面でやりたいなと思うことも多々あるが、その分多くのインターンにも参加できているため、不満はない。(ID32)

就活のオンライン化が進むにつれて、他の就活生さんとの交流が激減した点に関しては、やはり少し物足りなさを感じます。(ID3)

全てオンラインで開催されたため交通費が節約できた。説明会に関しては対面よりもオンラインの方が質問しやすいため、個人的にはコロナウイルス終息後も対面と並行してオンライン説明会も引き続き開催されてほしい。学内の説明会に参加した際に、偶然出会った同級生に対して気軽に現在の就活状況について尋ねることができたのは、対面ならではのメリットであったと考える。(ID21)

2月にもオンラインのインターンシップに参加した。見聞を広める目的で県外の企業のインターンシップにも参加した。参加の形式において、対面かオンラインかを選択できるようになっていたため、オンラインで参加することが可能となった。日程が調整しやすく、交通費が掛からない点で、オンラインでのインターンシップはとても良い形式であると感じた。3月には企業説明会が始まった。マイナビが主催する合同企業説明会に対面で参加した。私と同じ就活生がたくさんいることを目の当たりにし、企業の方々と直接お話することができたことは、貴重な経験となった。高校時代の友人にも偶然再会した。他にも、個別の企業説明会に対面やオンラインで参加した。マイナビでは、企業説明の動画をオンデマンドで視聴することができたので、時間を有効に使うことができた。4月からは選考が始まった。1次選考や2次選考はオンラインでの面接や、テストセンターでの筆記試験だった。テストセンターの試験を無料で受験し、その試験結果を他の企業の選考にも使用することができた。この点でも非常に助かった。夏休みまでには希望する企業から内定をいただくことができた。3月からは無我夢中だったが、振り返ってみると時間やお金を有効に使うことができたと思う。(ID22)

コロナ禍という未曽有の危機は、単に就職活動においてはそれほどマイナスには働いていないと思う。精神的にも、オンラインでの面接の方が緊張が小さかった。それは、コロナ禍初期の頃と比べて、私も社会もオンラインというものに適応したからだと考えている。一方で、人とリアルな関係性を築くことにハードルを感じるようにもなった。(ID22)

留学については、在学期間中に留学できなかった後悔を記述するものが見られた。コロナ禍前に留学しておけばよかった、また2022年には、愛媛大学法文学部では留学や海外研修が再開されることが多くなったが、就職活動や卒業時期との関係で断念せざるを得なかった記述が見られた。

2020年には夏に予定していた留学が中止され、日常生活の中に行動制限が課され、私たちの2020年は本当に空白の1年間だったと友人との会話でよく話題になる。あれから2年が経ち、インスタグラムのストーリー投稿を見ていると今年の夏頃から留学に行った友人が複数人いる。ほとんどが休学をして留学に行く選択をしたようだが、私にはその勇気がなく、結局就職活動を始め、9月末に内定が出て一安心した。GS コース独自の留学制度を目的に入学したが、留学することなく卒業しようとしている。こんなことになるのならば1回生のときに留学しておけばよかったと思うことも多々あるが、生きていればどこかのタイミングで実現できるかもしれないと希望を持ち、来年から一生懸命働く決意である。(ID21)

6．今後の課題

本稿は、コロナ禍の学生生活を理解するために、愛媛大学法文学部学生によって書かれた手記を分析したものである。2020年度から新型コロナウイルスの感染拡大に伴う愛媛大学法文学部学生への影響について、アンケート・手記・座談会等を通じて具体的な被害や葛藤、適応するプロセスの一端を明らかにしてきた。

2022年度の手記では、対面授業が再開し大学生活全般にわたって、肯定的な内容が目立った。特徴的なのは、学生にとっては対面授業への転換が、喜びであるとともに相応な不安や葛藤をもたらす変化であったことである。通学に関する時間が増えたことは、実質的に移動する時間だけでなく、通学時間に合わせた早起きや朝の準備時間を必要とすることも意味する。大学の授業時間は90分間と高校までに比べて長く、受講に関して集中力を必要とする。さらに、対面授業に伴い他学生との交友関係が広がり、また深まることも喜ばしいこととしながらも、不安や葛藤、ストレスを生み出している。ストレスについては、学生によってその時期や程度は様々であり、なかにはメンタルヘルスの不調を感じている者もいることは見逃せない。これらのストレスが、学生自身が対面授業に慣れるまでの過渡的なものであるのか、引き続く課題になるのかは今後留意してみていかなければならない。

また、在学期間のほとんどが遠隔授業であり、多方面にわたり行動制限の下で生活してきた4回生からは、就職活動のオンライン化の変化を喜ぶとともに、他学生の状況が見えないまま就職活動に取り組む不安を抱えていることが明らかになった。

手記を寄せてくれた学生は、愛媛大学法文学部の一部に限られるものの、2022年度の特徴を表していると考えている。原則対面授業への切り替えは、学生にとっては思い描いた大学生生活のスタートであり、授業内容の理解が深まることや他学生との交友関係が広がることを喜び、前向きにとらえている。同時に、遠隔授業から対面授業への転換は、メンタルヘルスの不調をもたらすようなストレスも生じさせている。コ

ロナ禍が始まった2020年には、感染拡大予防の観点から対面授業から遠隔授業に切替えざるを得ず、とりわけ入学したばかりの1回生は他学生と知り合う機会もなく、一人で慣れない大学の授業に取り組まなければならなかった。そのストレスは大きく、さらに遠隔授業にようやく慣れた後の対面授業への転換である。メンタルヘルス不調を抱えながら、大学生活を送らざるを得ない学生に対して、どのような体制で支援していくのかが今後の学生支援の課題である。

コロナ禍が日常になりつつある現在、「ウィズコロナ」そして「アフターコロナ」時代に突入していくと同時に、このような学生の声が、どのように変化していくのか。今後も継続的に調査を行い、学生の様々な意識や行動の変化を把握していきたい。

謝辞

手記を寄せてくれた法文学部学生の方々ならびに手記募集に携わって頂きました法文学部の教員に感謝の意を表します。また、この研究は、令和4年度法文学部戦略経費、令和4年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）及び JSPS 科研費19K21723の助成金交付により遂行されたものです。

参考文献

1）クリッペンドルフ（1989）『メッセージ分析の技法：「内容分析」への招待』（三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳）勁草書房.

2）森ウメ子，大橋千栄子（2008）「手記から学ぶ病児の理解ー学生の読後感レポートからの分析ー」，『太成学院大学紀要』10,121–131.

3）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ－学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果－」愛媛大学法文学部論集第50号（社会科学編），pp37-68.2021.2月.

4）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ－2020年度学生座談会報告書－」愛媛大学法文学部論集第51号（社会科学編），pp117-138.2021.9月.

5）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ－2020年度学生手記の分析－」愛媛大学法文学部論集第51号（社会科学編），pp93-111.2021.9月.

6）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ－2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果－」愛媛大学法文学部論集第52号（社会科学編），pp19-54.2022.2月.

7）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅵ－2021年度学生手記の分析－」愛媛大学法文学部論集第53号（社会科学編），pp37-57.2022.9月.

8）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ－2021年度学生座談会報告書－」愛媛大学法文学部論集第53号（社会科学編）pp133-150.2022.9月.

9）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅶ－2022年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果－」愛媛大学法文学部論集第54号（社会科学編），pp97-134.2023.3月.